

## 仙台市博物館協議会（令和5年度臨時会）会議録

1. 会議の年月日 令和5年10月17日（火）

2. 開会及び閉会の時刻 午後3時30分から午後4時45分まで

3. 出席委員の氏名（五十音順・敬称略）

尾崎彰宏、鹿又喜隆、佐治ゆかり、齋藤敦子、佐藤憲子、高橋卓誠、伊達泰宗、長岡龍作、森美智子  
※佐治ゆかり委員はオンラインでの出席。籠橋俊光委員は欠席。

4. 説明者の職及び氏名

館長＝今井吏、副館長＝樋口智之、庶務係長＝村上明日香、学芸企画室長＝酒井昌一郎、  
学芸普及室長＝水野沙織、指導主事＝村上聡、学芸企画室主任＝菅原美咲、  
学芸企画室主事・記録＝寺澤慎吾

5. 議題及び報告並びに議事の要旨

（1）会議録署名委員の選任

会長と伊達委員とする。

（2）報告事項

○大規模改修工事の成果について（副館長報告）

「資料1」のとおり。

〔委員からの意見〕

改修後の展示室などを拝見し、最先端で、これで安心だと感心した。再開館をするのであれば、こんなに違うのだということ強調しないともったいない。ガラスの色が違うとこれほど見え方が違うとか、最先端の博物館で見る日本の美であるとか、そうしたイメージを再開館の中に取り入れた方が良い。

今回ボランティアガイドは無くなるということか。

〔事務局からの回答〕

ボランティアガイドは引き続き実施する。解説ボランティアの活動については、声掛けをする際に、お客様がそれを望んでおられるかどうかは確認して解説に入るようにする。感謝の声もあり、需要はあると考えている。また、ボランティア活動が始まったきっかけに生涯学習の高まりがある。実際に学びながら、展示解説に生かす、学びの場という意味でも生涯学習施設である博物館でボランティアを導入している。

コロナ禍を含め、3年間ほどボランティアガイドの実践の期間が空いているため、事前の講習などをしながら、お客様に寄り添った適切なガイドができるように努めてまいりたい。

最新の展示ケースのことをPRする、わかりやすく示す、ということについては、展示ケースを造った丹青社に、展示ケースの特徴を紹介する映像を製作してもらっている。

〔委員からの意見〕

博物館だけでなくもっと大々的に PR した方が良い。今まで同じモノを見ていたのに、こんなに違う、変わりますよ、というだけでも面白いと思う。

博物館職員の中で考えて作ったポスターを見たが、無駄なところはお金を使わずに省き、デザイナーなどお金をかけなければならないところは、お金をかけた方が良い。再開に際し、センスの良いキャッチコピーが欲しい。

〔委員からの意見〕

図録などについて、デザイナーを使ってもっとセンスの良いものを作る、という点はどういう検討をしているか。

〔事務局からの回答〕

現状では、当館としてデザイナーに頼むということが難しいところがある。頂いたご意見として参考にして今後の検討に生かしていきたい。

〔委員からの意見〕

大規模改修工事は、たいへんご苦労したと思う。無事に建物の改修が終わったということは、たいへん良かった。

デジタルアーカイブ（収蔵資料データベース）の推進が、休館期間を活用した機能強化として項目として挙がっている。デジタルアーカイブ化は、休館期間を“きっかけ”にすることが重要であり、継続的に博物館の基本的機能を強化する一番重要な部分である。休館を活用して基本的なアーカイブ化の土台ができたのではないか。1,500 件というとまだまだだが、これをどういった形で今後持続して行っていくのか。計画を聞かせて頂きたい。

〔事務局からの回答〕

デジタルアーカイブ化は博物館法でも新たな博物館の事業として謳われているため、当館としても力を入れていきたい。デジタル化については、コロナ休館をきっかけに始まった。同じ時期に博物館法の改正もあり、それに後押しされる形で、当館でも予算化して進めている。初年度は大量に（データや画像を）登録するため、予算化して業者委託によりデータ入力、画像登録を行い、来年 3 月の公開に間に合わせる予定である。それらの土台となるデータを、休館中に学芸員が写真を撮ったり、文章を書いたり、データ修正を行うなどして、準備をしており、現在 1,500 件という目標で進めている。次の協議会の時にはもう少し具体的な数字を出せると考えている。

次年度以降については、何点・何件という形で示すことができないが、収蔵品データベースに追加する資料を学芸員の方で選んでいる最中である。優先的に行うべきものや、撮影が必要なものなどを判断しながら、続けていきたい。

この件については、委員からも市議会において早期にご指摘頂いた案件であり、慎重かつできるだけ迅速に数を増やしていけるよう努力していきたい。

〔委員からの意見〕

1,500 件の作品をデータベースにしようとしている、ということで良いのか。

〔事務局からの回答〕

まだ業者にデータを渡すという段階には至っていないが、館内で担当学芸員がデータを入力し、デジタルアーカイブ担当に集約している状態である。内容に齟齬が無いか確認をした上で、データを業者に渡して登録作業を行っていく形となる。登録作業自体は業者側でかかる時間となる。

〔委員からの意見〕

手続き上いろいろあるということは分かった。来年の春には 1,500 件の収蔵品のデータが活用できるようになるということか。

〔事務局からの回答〕

その予定である。恐らく 1,500 件以上にはなると思われる。

〔委員からの意見〕

デジタルアーカイブについては、コロナ禍の議会で質問を行った。大英博物館やルーブル美術館が始めた、というニュースがあり、仙台の博物館でも是非やって頂きたい、ということで議会で取り上げ、数年間でここまでやって頂き、感謝したい。データベースソフトがどういうものか分からないが、イメージでは、360 度見える、というようなものであった。他館でも使われているということだが、ただ写真があって説明文が書いてあるだけのものでは、時代にあったものなのか。世界的なものを考えた時に、ネット上で世界からも見られるものであり、特に伊達政宗などは人気の戦国武将であるため、海外からも検索される可能性がある。海外の方々に対しても世界的レベルのデータベース化ができるのかどうか、ということを中心に考えている。ソフトはクラウド上で行い、コストを抑えるということだが、そのソフトは、国内向けのものなのか、海外にも発信できる、英語だけでなく他言語もできるようなソフトになっているのか。

〔事務局からの回答〕

多言語化については確認したい。ソフトについては、どの館でも使える汎用性のあるもののため、凝った作りにはカスタマイズできない。3D のように回るということが難しく、写真を並べる形になる。史料については、文書であればできるだけ一冊丸ごと入れる、ということになっている。美術工芸品については、全体図を見せなければいけないということになるが、撮影している写真が静止画であり、全方向から撮っていないものの方が多い。図録に使われるような写真を掲載するパターンが今の段階では多いと考えられる。今後課題になるのではないかと思う。

〔委員からの意見〕

文書などはそういった話で結構かと思う。芸術品については、そこまでの価値があるものだと思うため、海外のレベルに合わせたものにしていかないといけないと思う。今後検討の材料として進めてもらいたい。

〔委員からの意見〕

データベースは二つの方向で有効である。一つは数。なるべくたくさん出ているということ。もう一つは質。詳細な情報ということ。それらを両立させることは難しい。たくさん入れるということを進め、その後から、選ばれたものを。我々は東京国立博物館の e 国宝をよく使っている。あれは素晴らしいものである。全てが載っているわけではないが、相当役に立っている。どういうものがあるか、ということだけでも分かれば、相当有効な情報である。戦略的に進めると良い。言語についても、戦略的に単一言語でなく多言語で入れていくのが良い。また、会場で観覧されている方にも見られるものを用意した方が良い。

### (3) 協議事項

○再開館記念企画展について（学芸企画室主任報告）

「資料2」のとおり。

〔委員からの意見〕

記念祭、祭、ということになっているが、今までずっと待っていた人に対しては、長らくお待たせいたしました、という立場ではないか。「こりゃめでたい」という言葉も軽いような気もする。伊達家であれば、「あぁめでたい」だろう。さんさ時雨も「あぁめでたい」ではないか。「こりゃ」は無い気がする。タイトルは仮ではあろうが、もう少し慎重にした方がよい。

〔事務局からの回答〕

タイトルについて、目がかり、耳がかりする言葉を探して付けている。

〔委員からの意見〕

それではプロが聞いたらどうなのか、という意見を聴けば良いのではないか。学芸員の中で「こりゃめでたい」が耳に響きが良いというのでは、進化が無いのではないか。外部の意見も聴かなければいけない。

〔事務局からの回答〕

タイトルは改めて検討するが、博物館に全く興味が無かった方、これまで来られていない方が、えっ、と思うようなものを考えていきたい。再開館で喜びたい、幸せ、めでたい、ということが入るような形で引き続き検討していきたい。

〔委員からの意見〕

印刷物は再開の周知だと思うが、周知はポスター、チラシ、たんけんマップだけか。来年度予算を取る上でこれを挙げる予定か。他に考えていないか。

〔事務局からの回答〕

印刷物については、今年度は記載の通りである。広報として、来年度は展覧会だけでなく、再開館のイメージも含めてデジタルサイネージなど、デジタルの方で広報強化できないかと検討している。

〔委員からの意見〕

過去には伊達武将隊を使って番組を作成しているので、動画も考えて良いのではないか。チラシなどは公共施設がメインだろう。それを見て来られる方はいらっしゃるだろうが、時代に合わせた周知方法がある。めでたい企画をしているため、みんなでお祝いできるように、周知を広めるためにもホームページだけでなく、動画、Youtube や Instagram など流すなどを考えてはどうか。

〔事務局からの回答〕

動画を製作して広報することについては検討させていただく。まず可能なこととして、Twitter (X) を使って、イベントの中で写真を撮れる場所を作り、会期中に見てくれた人が広報してくれる、ということには挑戦したい。

〔委員からの意見〕

先ほどのプロ（デザイナーやライター）に頼むとか、市の広報課もある。来てもらって動画を作ってもらえるのではないか。作ってもらった動画を「X」などでリンクさせて挙げることも考えられる。自分たちだけでやろうということを考えないで頂きたい。そこを変えなければ、広がらない。

〔事務局からの回答〕

検討させて頂く。

〔委員からの意見〕

先ほど、ネットワークという言葉が出たが、サイバー空間のネットワークだけでなく、人的な垣根を取り払うということもある。お金がかかるのであれば、お金がかかるということを相談に行くとか、市の広報課などとプロジェクトを組んで行うなどしてもらいたい。これはすごいものを作ったな、すごい宣伝をしているんだな、ということをやってみて、今までの殻を破ってもらおうと、一つ先例ができる。リニューアルオープンなので、先例を作りやすい時期である。そういうことをしても良いのではないか。

〔事務局からの回答〕

予算については、どうしても限界がある。広報展開については前回、前々回からご意見を頂いているが、ただいま説明させて頂いた企画展の広報・チラシとは別に、再開館をアピールするものを用意したいと考えている。

〔委員からの意見〕

博物館は市民だけでなく観光客も来るため、文化観光局などと連携して予算を取るということは考えられる。また、予算はいろいろな所とくっつけることもできるかもしれない。やる気を無くしてしまったらそれで終わってしまう。(自分に) 言って頂いて、議会の方でも協力できるところはしたい。議会で取り上げることもできる。協力してやっていかないと変わらないのではないか。是非、相談して欲しい。まずは博物館の思いを出してもらいたい。

〔委員からの意見〕

私も委員の皆さんの一連の流れに大賛成だ。リニューアルというのは、今までと違うというのを見せる大チャンスである。これを逃すと次が無い。ここは大勝負を打つくらいのそれだけのイベントであるので、仕掛けたら良い。お金はどこかからとにかく取ってくるという発想から考えてはどうか。

単発の展覧会でなく、シリーズとしてリニューアル記念の展覧会を一連のイベントとして準備しているということで宣伝して行けば良い。お金が決まっている、お金が無いから宣伝できないと言うと思うが、今回は特別なので、そういうつもりで臨めば良い。我々がどういう風を感じているかというのを聞いてもらうのに、3月では間に合わないため、早めにこの会を開催してもらった。

〔委員からの意見〕

今日の会議で一番重要なのは、リニューアルのこの展覧会のことだったと思う。この企画展は、仙台という100万都市の博物館のリニューアル記念展覧会としては、小さすぎるのではないか。学都と呼ばれるくらい文化的な都市のリニューアル記念展としては、規模も小さいだけでなく、皆を待ってましたと思わせる力が足りなすぎるのではないか。(そのようになった) 経緯などを示していただきたい。

〔事務局からの回答〕

来年度の最初の展覧会が、博物館所蔵品による展示であるということには、二つ意味がある。一つは、長期休館していたため、新しい展示室で当館の所蔵品を見てもらいたいということ。企画展ではあるものの、総合展示室、特集展示室含めて名品を展示していくというもので、核となるのは企画展示室である。全体的に2階の展示室の様々なところに名品が並ぶという趣向で、待ちかねたお客様をお迎えしようということである。もう一つは、リニューアル後の最初の展覧会は、施設設備的に何が起きるか分からないため、他の所有者から作品をお借りして展示するのはリスクがある。そうしたことから、まずは当館所蔵の名品で展示を構成しよう形にしている。

〔委員からの意見〕

今日は実際に展示室内を写真ではなく、この目で見せて頂き、素晴らしいと思った。ガラスも緑ではな

く透明で、展示されるモノの良さまで映るのかと楽しみになった。その上で、先ほどシリーズ化したら良いという意見があったが、私もそのように思った。今回の企画展は、企画内容は分かるが、この博物館が1年先、2年先、3年先にどのように歩いていくのか、その見通しがある中でこの1点になるのではないか。そうしたときに、シリーズ化ではないが、最初借りたものはできない、ということであれば、第2弾、第3弾が打ち出されることによって、こんな風が変わっていくという方向性が見えてくるのではないかと感じた。

〔委員からの意見〕

今後の展覧会は、再開館記念の第1弾、第2弾、第3弾というシリーズということではないのか。

〔事務局からの回答〕

冠を付けるかどうかは検討したい。いま頂いたご意見を参考にさせて頂く。委員が仰ったように、最初の展覧会が、今後どのようにつながっていくのかについて、今回、担当学芸員が中心になって企画した体験型・企画型という能動的に展示を楽しむ流れは、昨年、メディアテークで行った出張展示でも意図していたことである。博物館にとっては一つの目指す方向性ではないかと考えている。プレイミュージアムという体験型の展示室は開館当時、先進的な取り組みとして始めたと考えている。ここには蓄積もあり、当館の魅力にもなっており、こうした長所は生かしながら、運営していきたいと考える。そうした意味でも委員のご指摘を、なお一層の検討を加えて生かしていきたい。

〔委員からの意見〕

資料に「どう変わる博物館」と書かれているため、2年間以上休館して、どう変わるのかというのはすごく大切なポイントだと思う。いまの体験型というのも、体験がその後1年先、2年先、どういう風になっていくか。アーカイブも同様だが、当初は1500件を予定しているが、私たちの見通しとしてはこの先、こんな近代的な博物館に育てていきたい、という何かテーマ性というのがあると、これから職員の異動もあるなかで、2年先、3年先を見据えた計画が見られるとよい。

〔委員からの意見〕

他の博物館には無い先進的なものを仙台でやるのだということを知りからも見られるようにするためには、企画展のイベントにある1日2回、親子10組というのは、少なすぎるのではないか。体験を売りたいのであれば、もう少し体験の数を増やしてもいいのではと考えるが、難しいか。

〔事務局からの回答〕

イベントとしては2回組んでいるが、展示室の方でもいらっしゃる方が体験できるブースを作ろうと考えている。「親子でミュージアム」は試験的に行うものであり、4月、5月に青葉まつりなどのイベントがあるため、2回の実施で予定をしている。

〔委員からの意見〕

今回は再開館記念であるため、できるだけ様々な組織を巻き込んで行って欲しい。休館中、各種イベントや、県美術館との共同での展示などを行っているため、できればそのようなところと、共催のような形で他の所から人を呼び込むような仕組みを作ってもらいたい。体験学習も、博物館で行わなくとも別の所で開催して、博物館に関心を持ってもらい来館して頂くということも考えられる。今回の再開館に関しては、組織を作ってうまく入館者を増やしていくのがよいのではないか。タイトルに、記念祭とあるため、中だけで行うのではなく、もう少し周りを巻き込んだ形でイベントにして頂くと良いのではないか。それぐらいやらないと、博物館だけでやっていて周りに広がらないのではという心配もある。計画の段

階で、こういったコネクションを使って様々なことを実施することが、非常に大事だと思う。何を具体的にどのように行うかと考えてもらいたい。我々もコメントするだけでなく、協力したい。

また新しい展示ケースの中で、色鮮やかなものが展示の中心になってくるため、良いところに目を付けていると思う。頑張ってもらいたい。

〔事務局からの連絡〕

次回協議会は、令和6年1月30日、ギャラリーでの開催を予定している。